# 水というバトン

山添村立山添中学校　二年
畑中　佑介

　僕の住んでいる山添村は、三重県と奈良県の県境にある小さな村です。観光や大きな産業もこれといってなく、ほとんどの人が近くの町に働きに行きます。どちかと言えば少しの生活は不便に感じることもありますが、それなりに、僕は楽しく暮らしています。

　そんな山添村の中でも、僕の暮らす地区は百戸ほどの家が集まっています。上下水道の整備は都会のように整っておらず、簡易水道という物があります。簡易水道は近くの川から水を取り、一旦貯水槽に貯めて、各家々に分けて使えるようにしています。その水道は、地区の人が役員を決めて、貯水槽の洗浄や消毒メーターの管理などを行っています。

　昨年、ぼくの祖父がその役員になり、何名かの人と一緒に貯水槽の管理をすることになりました。

　祖父たちは、定期的に日を決めて清掃作業や水を取り込む川の見回りなどを行います。水を取り込む川は山から流れているため、土や砂、落葉が入り込むことがあります。時に雨が降れば、一気に山を下る水が土や砂を一緒に運び込んでしまうので、水を取り込む、パイプを外したりしなくてはいけません。雨の時間を決めて降るわけではないため、突然夜中に大雨が降ってきたりすると、

「えらい雨や、パイプ外しに行ってくれ」

「ゴミが入ったかもしれへん。一緒に見に行ってくれ」

などと、祖父のところに、電話がかかってきます。夜に玄関で長ぐつをはいている、祖父見て、

「どこ行くの」と

聞くと

「ちょっと水道の槽に土が入ったみたいやから、水道組合の人と一緒に見に行ってくる

わ」と祖父は、夜中であっても、雨ガッパを着て、懐中電灯を片手にスコップなどをトラックに積み、貯水池に出かけて行きました。

また、定期的な清掃作業であっても、自分たちの背より深い貯水槽に入り、水を抜いて、底にたまった、泥や砂をバケツに入れ、みんなでリレーをして取り出します。

祖父は、昨年に骨折してしまい、作業ができない時は、祖母が代わりに出て作業をしていました。

高齢者の多い山添村では、祖父もまだまだ役員として活動しなければいけないので大変そうです。

最近になって、外国人が山村の土地を買っているという話を聞きました。水源地のある山を買い、水を引こうとしているということだそうです。

確かに、ぼくたちの村の水はきれいだし、日本国中どこ行っても質の良い水が蛇口から出てきます。

しかし、外国には、そんなに質の良い水が出ない国もあり水の大切さを考えれば日本の土地ではなく良い水がどれだけ価値があるかは、わかりきっていることだそうです。

僕達は、良い水が蛇口をひねるとすぐに出てくることが当り前になっているので水の大切さも外国の人々に比べるとわかっていないのかもしれません。

ぼくは、祖父が一生懸命に地区の人々と一緒に地区のために、水源の管理や清掃に取り組んでいる姿を見て、いかに水が大切でその皆の協力のおかげで安全でおいしい水が飲めたり使うことができると知りました。

この水は、祖父たちから僕たちへわたされるバトンだと思います。僕も大人になったら大切に守っていき、また、水の大切さを伝えていけるようにしたいと思います。